

# 米国中間選挙現地リポート

山本健太郎 — 北海学園大学法学部教授

## 1 はじめに

本年一月八日、米国で中間選挙が投票された。結果は読者もご案内の通り、上院では民主党が多数を維持し、下院では共和党が僅差で過半数となった。いわゆる「ねじれ」が生じたもの、とかく大統領与党に厳しい結果となりがちな中間選挙としては、民主党が善戦したとの受け止めが一般的だろう。

私事ながら、筆者は六月末から一年間の予定で、マサチューセッツ州（以下MA州）ボストン近郊のハーヴァード大学に籍を置き、在外研究を行っている。日々の生活の傍ら、現地にて中間選挙を観察する機会を得たので、本稿はその見聞録である。筆者は米国政治を専門とするわけではないので、あくまで他国を専門とする政治学者が個人的に観察したりレポートとしてお付き合いいただければ幸いだ。なお、公職名や氏名などの邦訳は筆者が行い、選挙結果はニューヨークタイムズのウェブサイトを参考にした。写真は筆者か筆者の家人による撮影である。

## 2 州知事選

MA州は、残念ながら上院の改選議席がなく、恐らく日本で最も注目を集めたであろう上院選については、指をくわえて（テレビや新聞報道を）みていることしかできなかったが、恐らく仮に改選議席があったところで、状況はさほど変わらなかったかもしれない。米国では、二大政党のシンボルカラーに合わせて、民主党の強い州を「青い州（ブルー・ステイト）」、共和党の強い州を「赤い州（レッド・ステイト）」と呼ぶが、青い州はニューヨーク州など東海岸の北部と、カリフォルニア州など西部に集中している。とりわけMA州は、濃い青色の州であり、現に九議席ある下院選では、すべての選挙区で民主党候補が勝利した。現職の上院議員も二名とも民主党であり、仮に改選があってもスウィング・ステイト（接戦州）ほどの注目は集まらなかった可能性がある。

上院選がない当地で最も注目を集めていたのは、州知事選だった。二〇一五年から現職の州知事チャーリー・ベイカーは共和党の穏健派である。青い州にもかかわらず、歴代の州知事は民主党に

偏ってはいない。一九七五―一九九一年は民主党、九一―二〇〇七年は共和党、〇七―一五年は民主党の知事が務めてきた。今般、二期目の任期満了をもってベイカーが退任することになり、新知事の誕生を見据えて選挙戦が盛り上がりを見せた形だ。

ただし、州知事選の盛り上がりも、主戦場は九月の予備選だった。民主党は、有力なライバル候補が早々に撤退したことで、州司法長官を務めるモーラ・ヒーリーの独壇場となったが、共和党はジェフ・デイルとクリス・ドーティの争いとなった。ここでもその存在感が否応なく浮かび上がった。ここでもその存在感が否応なく浮かび上がったのが、ドナルド・トランプ前大統領である。

デイルはいわゆる「トランプ推し」の候補であり、穏健派の企業経営者のドーティとは対照的だった。予備選は、五五・五五の票を得たデイルが、四四・五五のドーティを下し、共和党の知事候補となった。だが、同じ共和党ではあっても、穏健派の現職知事に比べてトランプの影がちらつくデイルへの本選での支持は限定的なものにとどまった。ヒーリーとデイルによる選挙戦が確定したのちの世論調査では、一貫してヒーリーがリードし、本選でもヒーリーの六三・五％に対して、デイルは三四・九％の得票に終わった。

この選挙は、共和党にとって極めて皮肉な経過をたどったように見える。八年ぶりに民主党知事となるヒーリーは、MA州の初の女性知事であると同時に、同性愛を公表している人物だ。同性愛を公言する者が知事となったのは全米でも初のこ

とで、かなりリベラル色の濃い候補だといえる。

そのような人物と本選で相対することが確定的でも、共和党の選出はトランプ派のディールだった。

現職のバイカーがそうであるように、共和党が穏健な候補を選んでは、ヒリーの強いリベラル色を嫌う中道寄りの有権者の票を得られたかもしれない。しかし、あえてそうしなかったというよりは、そうできないところに、他の地域にも相通じる共和党の隘路があるのだろう。

つまり、党内の予備選を勝ち上がるには、急進的で声の大きいトランプ支持の票を狙わなければならないが、そこに力点を置きすぎると、民主党候補との本選では保守系以外の票を取り逃がすことになってしまう。予備選では合理的な行動が、本選では非合理的な選択になってしまうのである。皮肉なことにはこのジレンマは、このような事態を招いた張本人であるトランプ自身にもあてはまる。

二〇一二年大統領選でのトランプ当選から向こう、米国における世論の分断を指摘するのはもはや常套句となっているが、筆者には共和党内の分断がもたらすジレンマもまた、深刻なものに映る。実は民主党も右派と左派の分断を抱えており、米国の分断は、一筋ではなく、何重にも重なっているということには注意を向けておく必要があるのではなからうか。

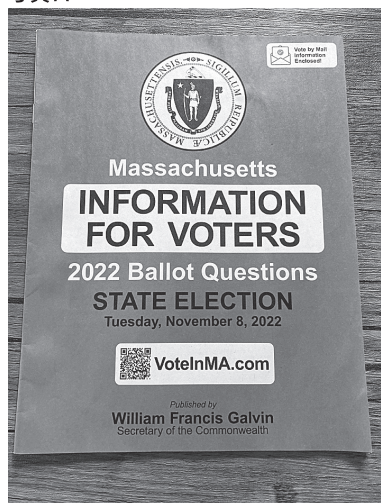
### 3 選挙戦の実態

さて、専門外の分析はこれくらいにして、残り個人的な選挙戦の見聞録を。九月六日に予備選が終わると間もなく、自宅のポストにMA州連邦長官名の三〇ページほどの冊子が届いた。その名も「有権者のための情報」である（写真A）。そこには、投票に必要な有権者登録、郵便投票や期日前投票の方法などが記載されているほか、実施される選挙の一覧が掲載されていた。

それによると、今回の中間選挙で実施された選挙は以下の通りである。①州知事・副知事、②司法長官、③州務長官、④財務官、⑤会計検査官、⑥下院議員、⑦州評議員、⑧州議会上院議員、⑨州議会下院議員、⑩地方検事、⑪保安官、⑫一部の郡長官、⑬一部の証書登記官。これらに加えて、四つの住民投票が実施された。

率直に言って、一度にこれだけの選挙が行われ

写真A



ることに驚きを禁じ得ない。投票票の手間だけを考えても膨大だろう。二大政党が圧倒的に強いため、党派ラベルに基づいて投票すれば情報探索のコストを下げられるとはいえず、すべての選挙の身や候補者を十分に理解・吟味して投票する有権者がどれほどいるのか、単純に疑問ではある。

そのことを反映してか、筆者が見聞きした限り、有権者が注目する選挙はこのうちのごく一部というのが実態のように思われる。筆者は現在、ボストン市の西部に隣接しているブルックライン市に在住しているが、同市の繁華街であるクーリッジ・コーナーを中心とした地域で観察したことを以下に記す。

筆者が渡米したのは六月末だが、それから九月上旬の予備選までの期間、街中で最も目にしたポスターは州下院議会議員選の民主党候補者のポスターだった（写真B）。この地域は同選挙のノーフォーク15区にあたり、民主党現職のトミー・ヴィトロに、新人のラウル・フェルナンデスが挑む予備選が展開された。ヴィトロは二〇一八年初当選で、二〇年に再選され、三期目を目指す選挙戦だった。

当地では、日本の選挙で目にするような公設のポスター看板はなく、自宅の庭先に写真Bのような立て看板を設け、支持する候補を応援することが一般的に行われている。街頭演説や選挙カーも存在しないので、候補者や政党の集会に出かけない限り、ニュースやCMなどメディアを通しての



写真B



情報以外から選挙戦の熱を感じることは難しい。したがって、庭先の立て看板は選挙戦の存在そのものや、情勢を把握する重要な情報源の一つになる。

ヴィトロの看板の数はフェルナンデスのそれを一貫して凌駕しており、現職の支持基盤の厚さを感じさせるものだった。特に、予備選の一週間前頃からは、繁華街の駅前に事務所が設けられ、庭

先の看板の数も一気に急増した。当然ながら、庭先にヴィトロやフェルナンデスの看板を設置する家は民主党支持だと推測されるが、他の選挙の候補の看板を併設する家は必ずしも多くはなく、知事選候補のヒーリーのそれを時々見かける程度であった。少なくとも看板に関しては、州下院選が他を圧倒していた。

運動の甲斐あつてか、それとも現職の強みゆえか、ヴィトロは予備選でフェルナンデスを退けた。ヴィトロの得票率が六三%、フェルナンデスが三七%であった。同区に共和党の候補者は不在で、同党の予備選も行われなかったため、予備選に勝利した時点でヴィトロの再選は確実になった。

余談だが、予備選の二週間後の週末、クーリッジ・コーナーで「ブルックライン・フェスティバル」が開催された。その名の通り、日本でいう秋祭りのようなものである。地域の行政機関や飲食店、商店などがテントを出して記念品を配布したり物販したりするなか、ブルックラインの共和党と民主党もそれぞれテントを出しており、民主党の区画にヴィトロ本人が座っているのに遭遇した。

思わず話しかけて握手をしてもらったのだが（写真C）、既に当選を決めた後だからか、こちらから声をかけない限りは特に何もせず、ただ座っているだけだった。日本の候補者なら、必死で通行人に声をかけて握手でもするだろうし、そうしなければ先輩政治家や陣営幹部に厳しく叱責されてしまうだろう。当選が決まった後とは言っても、



写真C

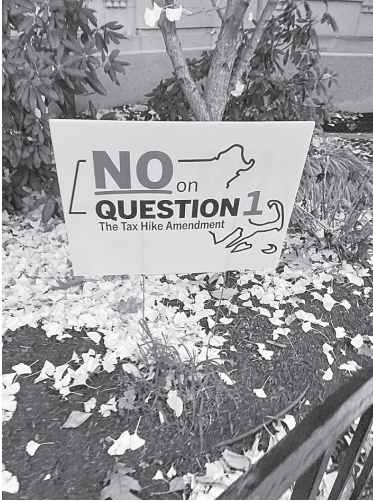
お礼の挨拶くらいは街頭でするのが一般的だろうし、いい悪いは別にして、所変わればを実感する出来事だった。

#### 4 重視される住民投票

本選までの二カ月で、上述した知事選と同程度か、あるいはそれ以上に人々の耳目を集めているのが、四つの住民投票である。予備選後に、多くの住宅でヴィトロの看板が撤収され、その代わりに住民投票に関わる看板が設置されるようになった（写真D）。

四つの住民投票では、①年収一〇〇万ドルを超える課税所得について、四%の追加課税を行うことを可能とする州憲法改正案、②歯科医療保険会社に対し、管理費を除く保険会社の損失率を八三%とすることを義務付ける法案、③一つの小売業者に与えるアルコール販売の免許を増やす法

写真D



案、④不法移民が運転免許証を取得できるよう認める法案、への賛否がそれぞれ問われた。

写真Dは、①に関する立て看板であるが、YesはともかくNoを堂々と掲げるのは、自分が高所得であることを公言するようなものだから、日本ではなかなか想定しにくいように思われる。Noの看板は見るからに所得が高そうな豪邸の庭に置かれていることが多いから、単に屋上屋

を重ねているだけだといえればそれまでではあるが。投票結果は、Yesが五二%となり、改正が認められたものの、筆者の感覚ではかなりの僅差に感じられる。それだけMA州は所得の高い者が多いということかもしれない。

②についても、米国ならではの法案である。こちらの医療保険では、保険料に応じてあらかじめ数百ドル程度の自己負担額が設定されていることが多く、保険が適用されるのは自己負担分をオーバーした部分だけである。当然ながら保険料が高ければ自己負担額は小さくなるが、そもそも医療費が高額なこと、受診すれば自己負担分の数百ドルは支払わなければならない。したがって、よほどのことがなければ、医療機関にかかることはないし、保険の恩恵も感じにくい。②の法案は、保険会社の損失率が八三%未満になれば、掛金を利用者に還付することを求めるものだ。こちらはYesを訴える看板しか目にしなかったが、やはり結果も七一%がYesを占めた。

③は酒類販売の規制を緩める法案だが、五五%がNoを投じ否決された。④は、免許証そのものというよりも、不法移民にどこまで社会的な権利を付与するかという文脈でとらえられる法案であるが、五四%がYesに票を投じ、認められることになった。

九月には、二〇二四年大統領選でトランプ前大統領の有力な対抗馬の一人と目されるフロリダ州のデサントイス知事が、約五〇人の不法移民を飛

行機に乗せ、MA州の有名な別荘地であるマールサズ・ヴィニヤードに強制的に移動させるという騒ぎが起こった。青いリベラルな州が不法移民を認めるなら、実際に引き受けろというデサントイス流の過激な実行使は、こちらでも大きなニュースになったが、④の法案でYesが多数となったことは、MA州の住民のデサントイスへの「返答」だったのかもしれない。

全体として、連邦議会の選挙では主役になりえないMA州では、中間選挙の焦点はもっぱら知事選や州議会選、住民投票などの「地域の課題」であった。スウィング・ステイトなら、全く違った光景が繰り広げられていたのだろうが、それだけこの国が広大だということなのだろう。

へやまもと けんたろう